

第5回：国際耕種における今後の活用の方向性

今回を最後に「誰でもできる国際耕種のリモートセンシング画像解析シリーズ」を一応、閉めようと思います。しかし、今後も随時我々の入手した経験・情報はできるだけわかりやすい形で皆様にご紹介していこうと思っています。国際耕種では今後も持続的開発に向けた乾燥地の農業・国内外の環境業務に係わりつつ、リモセン技術など新しい手法も導入してよりよい成果を出せるように頑張るつもりです。

これまで我々の取り組んできたリモセン関係の解析実績は、右に示しましたように数も内容もまだまだ不十分で試行錯誤の状態ですが、下に書きました GIS の考えかたも含め、今後の業務の柱の一つにしたいと考えています。

国際耕種がこれまで実施したリモセン画像の解析業務

- (1) UA日における砂丘移動調査
- (2) UA日における自然植生の種類別 季節別分光反射特性調査
- (3) UA日における栽培作物の分光反射特性調査
- (4) アフリカにおける植生区分
- (5) 国内での栽培作物現況把握調査

そこで今回は、国際耕種が今後リモセン技術、その関連情報に関する活用方法で、常日頃我々が話している内容を紹介しておきます。

(1) 画像情報と地図情報の組み合わせ

これは最近、地理情報システム (GIS) とか言った言葉で一般的にも普及してきたデータベースのことで、画像情報と地図情報をリンクした形で事象を表現しようとするものです。これまで画像は画像解析ソフトで、地形や土地利用など地図情報はマップ II やエクセル、さらに手作業など別々の作業で利用してきました。そのためこれらの関連を調べるときの作業は試行錯誤で、時間もかかり大変な作業量となっていました。近年、GIS 関連の市販ソフトのシステムも多くで回るようになってきており、これらを活用しデータの保存や分析を効率的に進めるような形にしたいと思っています。

(2) 地域開発業務への導入

画像の分解能がどんどん細くなってきて、より面積の狭い地域でもリモセン技術を使えるようになってきています。海外ばかりでなく国内でも「村興し」とか「グラウンドワーク運動」など特定地域での調査にも係わる機会が増えてきていますので、GIS 関連手法での解析をやってみたいと話しています。

(3) 事例の積み上げ

これまで耕種で行ってきたリモセン業務は数も少ないため、耕種内部でも一面的な使い方しか行っていません。また、解析ソフトを取り扱っている業者でさえ、ソフトをどのように活用できるかわからないと言いながら販売している業者もあり、実用面からの使い方は一般には十分浸透していない面もあると思います。今後、耕種では社内研究・調査、情報の収集などから、日常的な業務になり得るような情報を蓄積し、どのような分野で、どのように使えるか等の情報を集め、多くの分野で生かせるような技術にしていきたいと思っています。

沙漠の都市、Al Ainの発達 (UAE)

